

ヴィーチと神奈川県植物 1

小 原 敬

神奈川県に産する植物は主として幕末以降内外の研究者により科学的検討が加えられ、現在一応の解明が得られている。それは非常に困難な条件下で調査研究を遂行された数多くの先達の努力の賜物である。

このような先覚者として、ケンペル、ツェンペリー、シーボルト、マクシモヴィッチ、サヴァティエなど有名である。彼らは帰国後、わが国の植物について浩瀚な古典的業績を発表している。その偉業はこの事業に資料を提供した有名無名の内外の協力者の奉仕なくては達成することが不可能であったと思われる。

しかるに従来このような協働者の事績は余り紹介されたり、評価されたりしたことはなかった。

例えば、マクシモヴィッチの資料提供者として、わが国では須川長之助が最も有名である。しかしプチャーチン遣日使節の乗船ディアナ号の航海士ピョートル・ガヴリーロウィチ・ヨールキン海軍少尉が言語に絶する苦難を克服して下田付近で 630 種の植物を採集して、ペテルブルグ帝室植物園に持ち帰り、マクシモヴィッチの研究に供したことは最近小川政邦氏 (NHK) が紹介される迄は知られていなかった (ナウカ「窓」17:42-45, 1976)。

ヨールキンが下田付近で採集した植物の殆んど総ては神奈川県にも生育しているものである。

幕府が設立した横須賀造船所の医官として来日したサヴァティエ (Paul Amedée Ludovic Savatier, 1830-1891)(註)は1866年着任以来10年間医療のかたわら鋭意植物を調査し、標本を本国のフランシエ (Adrien Franchet 1834-1900) に送った。その共著「日本野生植物目録」1875-1879はわが国の植物研究史上永遠に輝く金字塔であるが、また神奈川県、特に三浦半島の植物を研究するのに欠くことができない宝典でもある。

この植物目録 (II) の巻末の文献リストに R・オールコック著「大君の都」(Rutherford Alcock: The Capital of the Tycoon; a Narrative of a Three Years' Residence in Japan, 2 vols. London, 1863) が収載されていて「M・ヴィーチが作成したこの国の植物学的特徴を十分

掴むことができる興味ある植物の一覧表が付録中に収められている」と記してある。

この「大君の都」は岩波文庫 (33-424-1-3) にも山口光朔氏の訳書が納められていて今日でも容易に入手できるが、私達が必要とするヴィーチの手になる付録(E)「日本の農業・植物に関する覚え書」はその内容を示す項目のみが訳されているだけである。

それで、ここに神奈川県産植物調査の先鞭をつけたが従来わが国の植物研究者が余り関心を払うことのなかったヴィーチの人物や、彼が作成した植物リストについて簡単に紹介してみたい。

先ず、「大君の都」の著者オールコックの経歴を略述する。彼はロンドン西郊のイーリングで1809年に医師の家に生まれた。15歳のときウエストミンスター病院などで外科医になる修業をした。1825年にパリに遊学し、語学、生物学、化学、解剖学など医学を学ぶのに必要な基礎学科を修めた。後ポルトガルやスペインに派遣された英軍の軍医に就任し、後に軍医副總監に昇進している。1843年に医院を開くため廈門にわたり、同地の領事館の一等書記官をも兼務した。後福州、上海、広東領事を歴任し、1859年6月、駐日英国総領事兼外交代表として来日し、翌年2月公使に昇進し、1862年3月賜暇帰国、1864年3月に帰任したが、同年12月下関砲撃事件で時の外務大臣と意見を異にし、本国に召還され、翌年駐中国公使に転出した。引退後彼はウエストミンスター病院理事長、工務省衛生委員、王立地理学協会会長などを歴任している。

オールコックが「大君の都」を執筆するに際し、農業や植物についてアドバイスを受けた J・G・ヴィーチ (John Gould Veitch 1839-1870) は英国のチェルシーの有名な種苗商ジームズ・ヴィーチ 2世 (James Veitch Jr. 1815-1869) の子息である。彼は当時植物の新種をさがしに来日していた。

なお、大井次三郎先生の「日本植物誌」(1972) 収載の「日本植物調査研究史」に James Gould Veitch が来朝したとあるが、これは John Gould Veitch の誤記である。同書巻末の「日本植物命名者表」では John となっている。

初代駐日公使オールコックの在日 3 カ年の記録「大君

OBARA, Takashi: English gardener J. G. Veitch and his deeds on the flora of Kanagawa
平和学園 (茅ヶ崎市)

の都」は、物情騒然とした幕末の政治・外交史の貴重な資料であると共に、当時のわが国の風物や庶民生活を知る上で重要な文献である。上述のごとく、また彼は少年時代約1年間パリで自然科学を学んだことがあるので、その手記にはわが国の農業、園芸、植物についても詳しく述べてある（第15章）。

彼はヴィーチの助けを借りて収集したさまざまな植物をキューとウインザーの王立植物園に送っている。1862年1月11日付「ガーデナーズ・クロニクル」紙には彼が本国に送った盆栽の一部にかんする記事が掲載されていて「大君の都」にその抜粋が引用されている。彼はわが国のシダ類、針葉樹とキクに特別の関心を払っている。

オールコックは来航前から日本事情を研究し、ケンペル、ツェンペリー、テイチングなどの著作を詳細に検討している。そして、いろいろな理由で神聖な山—富士山—登山を希望していた。

彼はこの登山隊に公使館の正規の館員以外に、科学的観測器具を携行していたインド海軍のロビンソン大尉と応用植物学者ジョン・ヴィーチを臨時館員として参加させた。ヴィーチを随行させたのは、オールコックの許に英国の著名な植物学者ウィリアム・フッカー（William Jackson Hooker 1785—1865）から「まったく知られていない日本の山岳植物、とくに富士山のそれについてなにかを知ることが、植物学者にとって最大の関心事である」と認めた書翰がもたらされていたからである。

1860年9月4日オールコック一行は神奈川の英国領事館を出発し、東海道を西に向かい戸塚を通り藤沢で一泊し、二日目は酒匂川を渡り小田原に達した。箱根路ではアカマツ、タケ、スギ、アジサイ、フジアザミ、カシ、カエデ、ブナ、ハンノキ、クリなどを認め、ヴィーチは多数の新しいシダ類その他の興味ある植物の標本を採集した。1861年3月1日ケンペルは江戸参府の際箱根でハコネシダを認めているが、ヴィーチもこのシダを採集したと思われる。それは1861年ハンス（Henry Fletcher Hance 1827—1886）がこのシダにヴィーチを記念して新種名を与えていることから推測できる。オールコックとヴィーチはここでアスナロを捜し当てて狂喜している。その後湯本、三島、沼津、原、吉原を通り富士山頂に達した。ここでロビンソン大尉は噴火口を測定し、山頂の標高、緯度、経度、羅針盤の偏度、気温を測った。山頂で二泊した後、吉原、原、沼津、三島、韮山、熱海、小田原、藤沢、戸塚、神奈川を経て、9月末に江戸に帰着した。

オールコック一行の富士登山は外国人としてはその嚆矢である。オールコックはその著書の中で、富士山の裾野では草が高く生い茂り、その上部では森林が麓をとり

囲み山腹まではいあがり、下方ではカシ、マツ、ブナなどの大樹が生育しているが、やがて疎林となり、樹幹も細くなり、それと同時にカシ、マツがブナ、カバにとって代られ、森林限界を超え頂上付近では植物がまったく生育していないことを記し、この山の植物の垂直分布にも触れている。

またヴィーチは富士山でイラモミ、ツガ、カラマツ、シラベ、イチイなどを採集し、熱海ではネズ、箱根では上記のアスナロの他、イトスギ、ネズ、ヒメコマツ（ゴヨウマツ）、イチイなども採集している。

彼はまたこの旅行中観察することができた植物の目録と覚え書をまとめている。

次にオールコックとヴィーチが科学に貢献したことに對しその榮譽を称えるために献名された植物名を紹介する。

先ず、オールコックに献名された種名としては *Abies alcockiana* J. G. VEITCH がある。この種は今日のエゾマツ [*Picea jezoensis* (SIEB ET ZUCC.) CARR.] とイラモミ [*Picea bicolor* (MAXIM.) MAYR] を指すという。また *P. alcockiana* CARR. はイラモミに当る。それで本種の英名を Alcock spruce と言う。

一方ヴィーチに捧げられた属名に *Veitchia* LINDLEY がある。現在本属はトウヒ属 (*Picea*) に合併されている。したがって *Veitchia japonica* LINDLEY はエゾマツの異名となる。

しかし、この属名はフィリッピン、ニュー・カレドニア、ニュー・ヘブリジーズ、フィジーに分布している *Veitchia* H. WENDLAND (フィジーヤシ属) とは別属で、こちらの方はジェームズ・ヴィーチ2世とジョン・G・ヴィーチ父子を記念したものである。

現在使用されているヴィーチに献呈された種名としては *Sasa veitchii* (CARR.) REHD. クマザザ、*Abies veitchii* LINDLEY シラベ、*Crypsinus veitchii* (BAKER) COPEL. ミヤマウラボシがある。このシラベの英名は Veitch fir である。

また、*Selaginella veitchii* MACNAB. は *S. tamariscina* (BEAUV.) SPRING. イワヒバの異名である。それは前者が後者より発表が24年後になっているためである。*Adiantum veitchii* HANCE も同様の理由で *A. monochlamys* EATON. ハコネシダの異名とされている。

同じく、ヴィーチに献呈された変種名 *Woodsia polystichoides* var. *veitchii* HANCE は *W. polystichoides* EATON. イワデンダに併合されている。これは変種を設けたときに取り上げられた特徴が余り重要でなかったためであろう。

なお、中池敏之先生の *Emumeratio Pteridophytarum*

Japonicarum, Filicales (1975) では ミヤマウラボシの学名のエビセットが *Veitchii* となっている。「大君の都」の巻末の付録(E)では John G. Veitch となっているのでそれを所有格にして *Veitchii* とする方が正しいと思われる。

それから増補版牧野日本植物図鑑(1958)巻末の索引の小種名の説明中 *Veitchii* を「バイチ」と読ませているがこれはドイツ語読みであろう。

とにかく上掲の植物はその殆んどが神奈川県内に自生しているか栽培されているものである。

上述の如く、オールコックの著書にはその巻末に、ジョン・G・ヴィーチが作成した「日本の農業・植物にかんする覚え書」が収蔵されているので次にその項目を掲げておく。

〔付録 E〕

日本の農業・樹木・フロラにかんする覚え書

1. 横浜・神奈川地区の農業

- a. 地区の主要作物
- b. 地区の蔬菜
- c. 地区の果樹
- d. 地区のフロラ(植物相)

2. 江戸・神奈川近郊に生育する主要木材樹種

3. 日本の樹木とフロラにかんする追記

4. ジョン・G・ヴィーチ氏によって英国にもたらされ、現在ヴィーチ氏父子の施設で栽培されている日本植物にかんする覚え書。

5. 1860年、W. フーカー卿に送った種子のリスト。

6. キュー王立植物園向けケースの内容。

本書の訳者山口光朔氏はこの項目中の「flora」を「花」と訳しておられるが、これは「植物相」の方が良いと思う。

1-d. 横浜・神奈川地区のフロラ

この地域の植物相は日本全域と全く同様に、常緑植物が極めて豊富なことと特に注目される。この国は冬季中でも緑をまとうて生き生きとした景観を呈する。それはこの付近の野外に生えている植物の殆どはこのクラスに属しているからである。松柏植物が著しい役割を演じている。ほとんどが日本に固有の多くの種類である。

華やかな花をつけた植物の種類は予想されるほど多くはないが、木の群葉の豊富なこととその変化はそれを十分償っている。この地区は全般的に起伏していて、丘と谷の波が続いている。前者はほとんど未耕地で、地球のこの地域での最も興味ある植物学的試料のいくつかを含んでいる。

日本人は優れたアマチュア園芸家である。大小の家々にはそれに隣接して庭園をもっている。植物は全国からもたらされ、珍種にはしばしば高価な金銭が支払われている。次表は神奈川付近の野外で見出される植物の主要な属と種の目録である。

Abies モミ属 1種

Acer カエデ属 3~4種

Alnus ハンノキ属 2種

Amaranthus ヒユ属 多数の変種

Aralia japonica [*Fatsia japonica* DECNE et PLAN-CH.] ヤツデ

Ardisia crenulata [*A. crenata* SIMS] マンリョウ

Aucuba japonica アオキ

Azalea [*Rhododendron*] ツツジ属 多くの変種

Balsamina hortensis [*Impatiens balsamina* L.] ホウセンカ

Bambusa タケ属 5種

Bambusa タケ属 葉の変種

Benthamia japonica [*Cornus kousa* BUERGER] ヤマボウシ

Berberis japonica [*B. amurensis* RUPR. var. *japonica* (REGEL) REHD.] ヒロハノヘビノボラス

Camellia japonica. ツバキ 最も普通

Camellia Sasanqua サザンカ

Celosia cristata ケイトウ

Celosia pyramidalis

Cephalotaxus Fortunei イヌガヤ

Cerasus flore pleno ヤエザクラ [恐らくサトザクラ]

Chamaerops excelsa [*Trachycarpus fortunei* (HOOK) H. WENDL.] シュロ

Clematis センニンソウ属 2種

Convolvulus アサガオ? 数変種

Cornus officinalis サンシュユ

Cryptomeria japonica スギ

Cryptomeria species nova スギの新種

Cupressus 多くの変種

Daphne ジンチョウゲ属

Deutzia ウツギ属 2種類

Dianthus ナデシコ属 多くの変種

Diervilla versicolor ニシキウツギ [現在では

Weigela decora (NAKAI) NAKAI が用いられている]

Elaeagnus グミ属

Eriobotrya japonica ビワ

Euonymus japonica マサキ

Filices シダ類 横浜付近の50種
Forsythia suspensa レンギョウ
Gardenia florida コリンクチナシ
Hedera Helix [*Hedera rhombea* (MIQ.) BEAN] キズタ
Hibiscus フヨウ属 2種 最も普通
Hydrangea アジサイ属 数種
Hypericum オトギリソウ属 2種
Illicium シキミ属 3種
Indigofera コマツナギ属
Iris アヤメ属 数変種
Jasminum オウバイ属
Juniperus ビヤクシン属 3～4種
Kerria japonica ヤマブキ
Laurus ゲッケイジュ属
Ligularia gigantea オオツワブキ
Ligustrum japonicum ネズミモチ
Lilium ユリ属 多数の変種
Lychnis センノウ属 2種
Magnolia モクレン属 2種
Morus papyrifera [*Broussonetia papyrifera* (L.)
 VENT.] カジノキ。ヴィーチは本付録〔E〕「3.日本の
 樹木とフロラにかんする追記」においてコウゾに
 本学名を当てている。
Nandina domestica ナンテン
Nelumbium speciosum [*Nelumbo nucifera* GAERTN.]
 ハス
Nerium Oleander セイヨウキョウチクトウ
Nymphaea スイレン属 2種
Olea オリーブ属〔恐らく *Osmanthus* モクセイ属を
 意味していると思われる〕 3種
Orchis ハクサンチドリ属 3～4種
Oxalis カタバミ属
Paullownia imperialis [*P. tomentosa* (THUNB.)
 STEUD.] キリ

Paenonia ボタン属 多数の変種
Pinus マツ属 5～6の異種
Primula サクラソウ属 2～3種
Prunus flore pleno サクラ属の八重咲品
Quercus コナラ属 常緑と落葉を併せて数種
Retinospora (*Retinispora*) [*Chamaecyparis*] ヒノ
 キ属 多くの種
Rhus vernix 〔恐らく *Rhus verniciflua* STOKES
 ウルシを指すものと思われる〕
Ruscus sempervirens [*R. aculeatus* L. ナギイカダ
 であろう]
Rosa バラ属 2種
Sciadopitys verticillata コウヤマキ
Skimmia japonica ミヤマシキミ
Spiraea シモツケ属 2種
Stauntonia ムベ属
Taxus イチイ属
Ternstroemia japonica [*T. gymnanthera* (WIGHT
 et ARM.) SPRAGUE モッコク]
Thujaopsis dolabrata アスナロ
Thuja クロベ属 2～3種
Tradescantia ムラサキツユクサ属
Ulmus ニレ属 2～3種
Viburnum ガマズミ属 2種
Vinca ニチニチソウ属
Vitis ブドウ属
Weigela タニウツギ属 2種
Wisteria sinensis and others シナフジその他

(註) サヴァティエの生年は1820年 (E. Hultén), 1829年 (岩崎義朗),
 1930年 (大井次三郎), 1831年 (コンサイス人名辞典外国編) などの
 諸説がある。